

アンケート調査に基づく 現代簿記論の研究

日本簿記学会 令和5・6年度 簿記理論研究部会
最終報告

2025年8月24日（日）
第41回日本簿記学会全国大会
東洋大学

部会メンバー

委員

市川紀子・部会長	日本大学	井上定子	甲南大学
小形健介	大阪公立大学	小野正芳・事務局	日本大学
首藤洋志	文教大学	仲尾次洋子	名桜大学
中村亮介	筑波大学	西山一弘	帝京大学
菱山淳	専修大学	苗馨允・リーダー※1	椙山女学園大学
宮川宏・リーダー※2	専修大学	吉田智也	中央大学

オブザーバー

坂上学	法政大学	角ヶ谷典幸	一橋大学
新田忠誓	一橋大学名誉教授	原俊雄	横浜国立大学

研究協力者

石光裕	京都産業大学	橋本武久	京都産業大学
-----	--------	------	--------

※1 「Ⅱ 簿記教育に関するアンケート調査の分析」におけるグループリーダー

※2 「Ⅲ 簿記研究に関するアンケート調査の分析」におけるグループリーダー

最終報告書の目次

I 序論

第1章 本研究の目的と方法（市川紀子）

第2章 『現代簿記論研究』の現代的意義 ―その過去・現在・未来―（橋本武久）

II 簿記教育に関するアンケート調査の分析

（苗馨允，小形健介，首藤洋志，仲尾次洋子，中村亮介，角ヶ谷典幸，原俊雄，石光裕）

第3章 簿記教育に関するアンケート調査結果の概要

第4章 簿記教育に対する満足度の考察

第5章 学生の簿記離れに対する心配度の考察

第6章 簿記教育上の簿記と会計の関係に関する考察

III 簿記研究に関するアンケート調査の分析

（宮川宏，井上定子，菱山淳，西山一弘，吉田智也，坂上学，新田忠誓，橋本武久）

第7章 簿記研究に関するアンケート調査結果の概要および考察

第8章 簿記研究に関するアンケート調査に関する追加分析

IV 結論

第9章 総括と課題（市川紀子）

I 序論

第1章 本研究の目的と方法

1 本研究部会の目的と研究方法

・本研究部会は、平成22・23年度の簿記理論研究部会（橋本武久部会長）の展開を目指し、「これから簿記はどうあるべきかと。われわれ簿記を研究して、教育している者たちが、簿記は何がエッセンスで、何を守るべきなのか、また、どう伝えるべきなのか」

（日本簿記学会簿記理論研究部会 2012, 4, 橋本の発言）,

「簿記学会のアイデンティティを残すとしたら、それを何に求めるか。他の会計系の学会との差別化をどうするのか」（日本簿記学会簿記理論研究部会 2012, 61, 中野の発言）,

という問いを踏襲したうえで、そこからの時間の経過・環境変化による「簿記」と「会計」の境界に関するコンセンサスの変化を明らかにすることを目的としている。さらに、簿記の学習者が減少していると思われる状況（簿記離れ）の原因と解消方法も明らかにするとともにその解消方法を検討する。

・これらを明らかにすべきと考えた理由は、本研究部会の研究成果から得られる知見が「簿記」に特化した教育・研究に貢献でき、簿記学会の差別化に貢献できるのではないかと考えたためである。

・研究方法として、日本簿記学会会員に対してアンケート調査を行う手法を取る。

・上記研究目的に沿ってアンケート調査をより詳細に検討するために、図表1-1のとおり、簿記教育と簿記研究の領域に分けたうえで、リサーチクエスション（以下、RQ）1, RQ2を主たる分析対象とし、追加的にRQ3, RQ4を分析する。なお、RQ1, RQ2は“Main Analysis”, RQ3, RQ4は“Additional Analysis”とする。

第1章 本研究の目的と方法

1 本研究部会の目的と研究方法

図表1-1

領域	分析	RQ	内容
簿記教育	Main Analysis	RQ1	日本簿記学会の会員は、簿記教育にどの程度満足しているのか。簿記教育の満足度に影響を与えている要因は何か。
		RQ2	日本簿記学会の会員は、学生の簿記離れをどの程度心配しているか。簿記離れの心配度に影響を与えている要因は何か。
	Additional Analysis	RQ3	日本簿記学会の会員は、簿記教育上の簿記の範囲をどのように捉えているか。簿記の範囲は、簿記教育の満足度や学生の簿記離れの心配度に影響を与えているか。
		RQ4	日本簿記学会の会員は、簿記教育上の簿記と会計の関係をどのように捉えているか。簿記と会計の关系到影響を与えている要因は何か。
簿記研究	Main Analysis	RQ1	日本簿記学会の会員は、簿記研究にどの程度満足しているのか。簿記教育の満足度に影響を与えている要因は何か。
		RQ2	日本簿記学会の会員は、簿記研究離れをどの程度心配しているか。簿記研究離れの心配度に影響を与えている要因は何か。
	Additional Analysis	RQ3	日本簿記学会の会員は、簿記研究の成果をどのように捉えているか。簿記研究の成果は、簿記研究の満足度や簿記研究離れの心配度に影響を与えているか。
		RQ4	日本簿記学会の会員は、簿記研究上の簿記と会計の関係をどのように捉えているか。簿記と会計の关系到影響を与えている要因は何か。

第1章 本研究の目的と方法

2 本研究部会の開催実績と先行研究の検討

- | | |
|----------|---|
| 第1回研究会 | 令和5年9月13日（水） 於：筑波大学
研究目的の確認及び今後の議論の進め方についての方針決定
市川紀子「第1回研究部会について」 |
| 第2回研究会 | 令和5年11月5日（日） 於：一橋大学
角ヶ谷典幸「簿記と会計の関係性と（学際的）簿記研究の可能性」 |
| 第3回研究会 | 令和5年12月10日（日） 於：法政大学
新田忠誓「企業複式簿記が誘導する会計等式」
坂上学「テキストマイニングの基礎」
アンケート質問事項の検討①（各委員より質問事項の提案） |
| 第4回研究会 | 令和6年2月18日（日） 於：日本大学
中村亮介「英文学術雑誌における近年の簿記研究」
アンケート質問事項の検討②（説明変数と被説明変数の整理）
研究倫理審査申請書の検討① |
| 第5回研究会 | 令和6年4月7日（日） 於：中央大学
吉田智也「簿記と会計との境界—連結財務諸表の作成は、簿記か会計か?—」
中村亮介「アンケート調査について」
研究倫理審査申請書の検討② |
| 第6回研究会プレ | 令和6年4月11日（木） 於：Zoom
坂上学「共分散構造分析の大雑把な解説」
アンケート質問事項の検討③（アンケートへの追加質問） |

第1章 本研究の目的と方法

2 本研究部会の開催実績と先行研究の検討

- 第6回研究会 令和6年4月28日（日） 於：大阪公立大学
橋本武久「『現代簿記論研究』の着想と意義：質問項目とインタビューの選定を中心に」
中村亮介「アンケート本体について」
小形健介「パス図について（仮説，危機感，満足度）」
市川紀子「パス図について（簿記と会計の境界）」
アンケート質問事項の検討④（質問事項の精査）
研究倫理申請書の検討③
- 第7回研究会 令和6年6月9日（日） 於：専修大学
ブレインストーミング
アンケート質問事項の検討⑤（質問事項の精査）
- 第8回研究会 令和6年7月7日（日） 於：椋山女学園大学
アンケート質問事項の検討⑥（質問事項の精査）
中間報告に向けた準備①
- 第9回研究会プレ 令和7年7月8日～8月3日 於：E-mail
アンケート実施形態検討（Google Form）
- 第9回研究会 令和7年8月4日（日） 於：文教大学
アンケート質問事項の検討⑦（質問事項の精査）
中間報告に向けた準備②
- 中間報告 令和7年8月31日（土） 於：神戸大学（台風の影響によりZoom）
日本簿記学会第40回全国大会

第1章 本研究の目的と方法

2 本研究部会の開催実績と先行研究の検討

- 第10回研究会 令和7年9月7日（土） 於：帝京大学
アンケート質問事項の検討⑧（質問事項の精査・最終調整）
- アンケート調査 期間：令和7年10月～12月末日（最終的には3月16日）
周知：郵便はがき，日本簿記学会HP，日本簿記学会ML
手法：Google Form
- 第11回研究会 令和7年2月9日（日） 於：兵庫県立大学
最終報告に向けた準備
アンケート結果の検討手法に関する議論
グループ分けによる作業分担の決定（簿記教育グループ，簿記研究グループ）。
各グループ検討会は下記掲載以外にも適宜開催。
市川，小野は各グループに適宜参加。
簿記教育グループ：苗馨允（リーダー），小形健介，首藤洋志，仲尾次洋子，
中村亮介，角ヶ谷典幸，原俊雄，石光裕。
簿記研究グループ：宮川宏（リーダー），井上定子，菱山淳，西山一弘，吉田
智也，坂上学，新田忠誓，橋本武久。
- グループ検討会 令和7年3月13日（木） 於：専修大学
簿記研究グループの検討会（宮川グループの検討会）
仮分析内容の報告、分析内容の検討ディカッション、今後の方向性
- グループ検討会 令和7年4月2日（水） 於：Zoom
簿記教育グループの検討会（苗グループの検討会）
仮分析内容の報告、分析内容の検討ディカッション、今後の方向性

第1章 本研究の目的と方法

2 本研究部会の開催実績と先行研究の検討

第12回研究会	令和7年4月27日（日） 於：筑波大学 市川部会長「最終報告と今後のスケジュールについて」① 簿記教育グループの報告（苗リーダーの報告）① 簿記研究グループの報告（宮川リーダーの報告）①
グループ代表等の検討会	令和7年4月28日（木）～最終回まで 於：E-mail 令和7年5月1日（木）於：Zoom リサーチクエスション，記述統計（デモグラフィックも含む），単変量分析，因子分析，重回帰分析，テキスト分析に関する各検討。 RQとストーリーの提案。
第13回研究会	令和7年5月25日（日） 於：法政大学 市川「最終報告と今後のスケジュールについて」② 簿記教育グループの報告（苗リーダーの報告）② 簿記研究グループの報告（宮川リーダーの報告）②
第14回研究会	令和7年7月6日（日） 於：一橋大学 市川「最終報告と今後のスケジュールについて」③ 簿記教育グループの報告（苗リーダーの報告）③ 簿記研究グループの報告（宮川リーダーの報告）③
最終報告	令和7年8月24日（日） 於：東洋大学 日本簿記学会第41回全国大会

第2章 「現代簿記論研究」の現代的意義－その過去・現在・未来－

1 はじめに

- 本学会の存在意義を問うテーマが「現代簿記論」

2 「現代簿記論研究」の源流

- 日本会計研究学会スタディ・グループ「複式簿記システムの構造と機能に関する研究」(2004)
 - ✓ 社会経済的背景の大変革を受け、簿記・会計を取り巻く環境も大きく変わろうとしていたという認識のもと、「簿記離れ」、なかでも大学教員間の「簿記離れ」という現実を直視し、この原因を検討。

3 「現代簿記論研究」の継承

- 日本簿記学会簿記理論研究部会「現代簿記論に関する研究」(2010)
 - ✓ 簿記はこれまでの社会経済的情勢においてどのような存在であり役割を果たしてきたのか、そして、現在の簿記はどのような立場にあるのか、これからどうあるべきかについて考察。

第2章 「現代簿記論研究」の現代的意義－その過去・現在・未来－

4 「現代簿記論研究」の展開

- 日本簿記学会簿記理論研究部会「アンケート調査にもとづく現代簿記論の研究」（2023）
 - ✓ もし『簿記』と『会計』の違いについて、日本簿記学会においてコンセンサスがとれていないならば、現段階における学会の共通認識を、学界人に向けたアンケート調査から明らかにする。
- 「簿記と会計の関係性」や「簿記離れ」といった課題は、常にわれわれの前に立ちはだかる課題。
- 簿記の社会的役割を再認識するため、また、教育的側面からも我々は常にこの課題に立ち向かう必要あり。

II 簿記教育に関するアンケート調査の分析

第3章 簿記教育に関するアンケート調査結果の概要

1 サンプルの選択

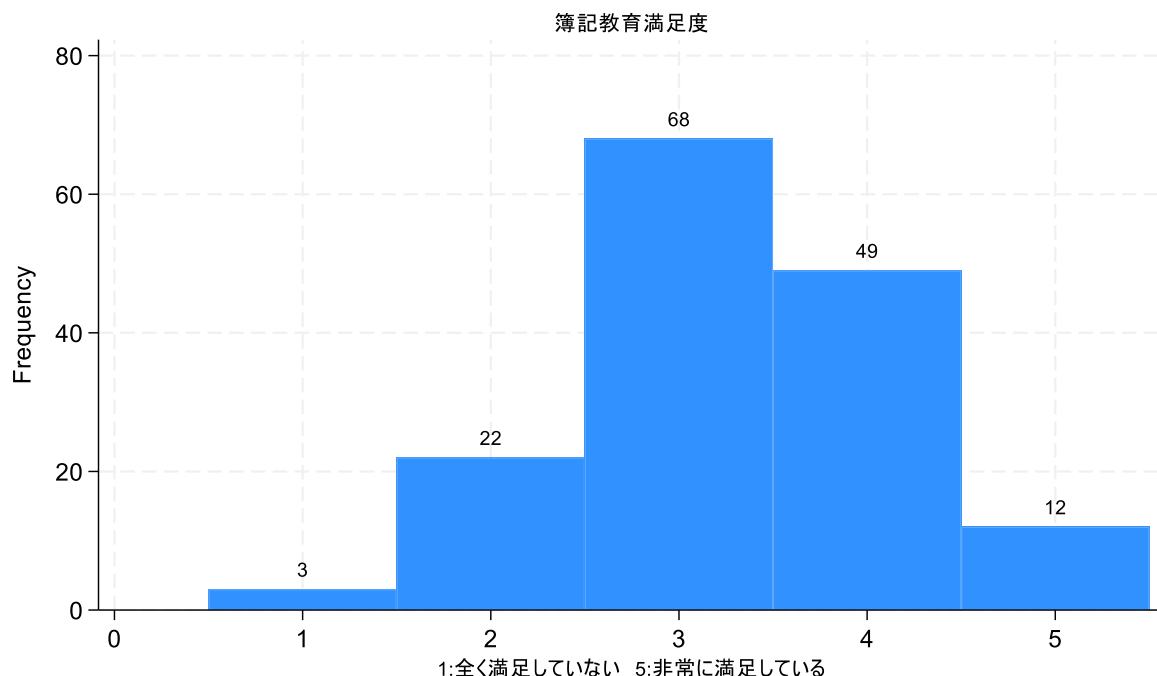
図表 3-1 簿記教育に関するアンケート調査のサンプルサイズ

	サンプルサイズ
回答総数	161 件
「同意しない」または空欄	5 件
問 1～問 2 の欠損値	2 件
簿記教育に関する分析に使われるサンプルサイズ	154 件

第3章 簿記教育に関するアンケート調査結果の概要

2 第1部（問1～問11）回答の記述統計

- 問1 あなたは、「簿記教育」（あなたや日本簿記学会の会員が行っている簿記講義の内容や水準）にどの程度満足していますか。



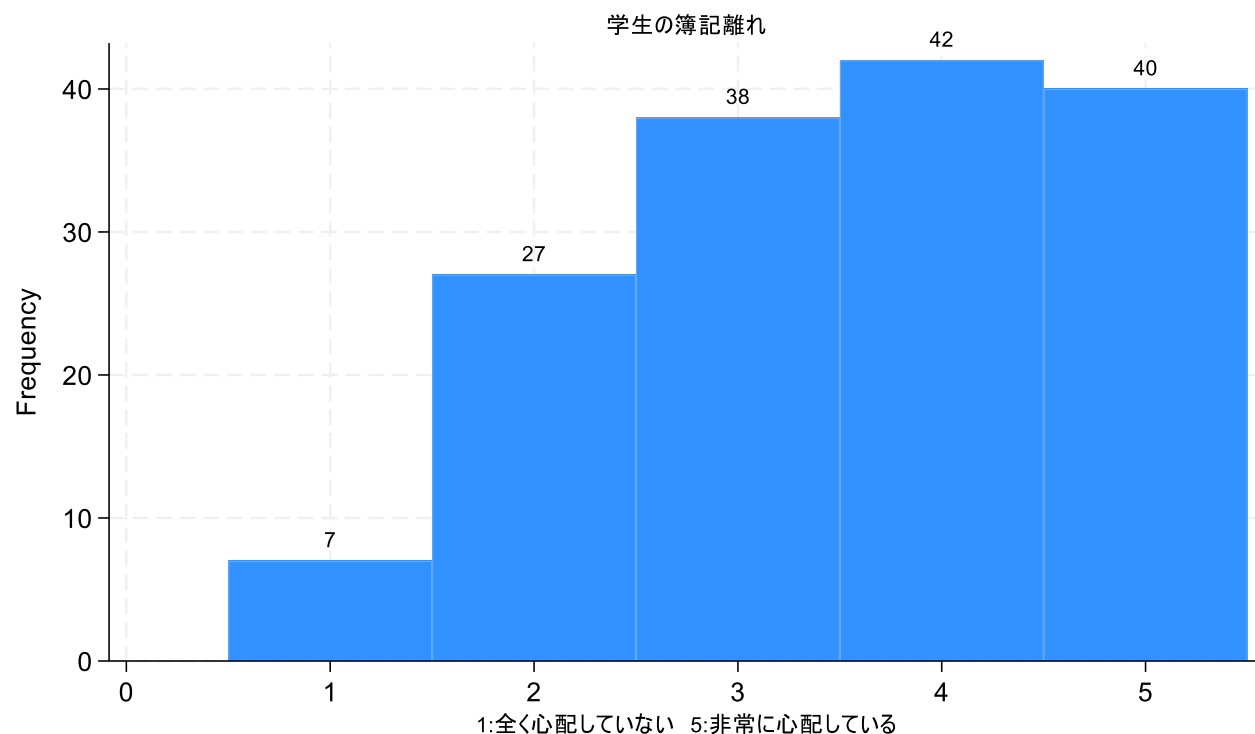
- 満足(4または5)の回答者は合計で61人(39.6%)であった。
- 不満(1または2)の回答者は比較的少なく、合計で25名(約16%)であった。
- 中立的な評価(3)を選択した回答者が最も多く、68人(44.2%)であった。

図表3-2 簿記教育に対する満足度の分布

第3章 簿記教育に関するアンケート調査結果の概要

2 第1部（問1～問11）回答の記述統計

□ 問2 あなたは、学生の「簿記嫌い」（簿記離れ）をどの程度心配していますか。



- 心配している(4または5)の回答者は合計で82人(53.2%)であった。
- 心配なし(1または2)の回答者は比較적으로少なく、合計で34名(約22.1%)であった。
- 中立的な回答者(3)は38人(24.7%)であった。

図表3-3 学生の簿記離れに対する心配度の分布

第3章 簿記教育に関するアンケート調査結果の概要

2 第1部（問1～問11）回答の記述統計

	N	%（回答4, 5）	%（回答1, 2）	Mean	t-test (Mean=3)
問1 簿記教育の満足度	154	39.6	16.2	3.292	4.132***
問2 学生の簿記離れに対する心配度	154	53.2	22.1	3.526	5.514***

t検定を用いて、各問の回答の平均値が中立（3）と有意に異なるかを検証した。

*, **, ***はそれぞれ有意水準0.1, 0.05, 0.01を示す。

- 簿記教育（問1）：39.6%の回答者は満足しており（回答4, 5）、半数以下となっているが、満足度の平均値は3（中立）を有意に上回っている（ $p < 0.001$ ）。
- 学生の簿記離れへの心配度（問2）：半数以上（53.3%）の回答者は心配しており、しかも心配度の平均値は3（中立）を有意に上回っている（ $p < 0.001$ ）。
- これらの結果は、全体として、簿記教育に対して満足する一方、学生の簿記嫌い（簿記離れ）に対して懸念を抱いていることを示している。

第3章 簿記教育に関するアンケート調査結果の概要

2 第1部（問1～問11）回答の記述統計

	N	% (回答4, 5)	% (回答1, 2)	Mean	t-test (Mean=3)
学生の簿記嫌いの原因					
問3-2 簿記学習の目的や意義がわかりにくい	154	53.9	27.3	3.364	3.606***
問3-3 積み上げ学習で努力を要する	154	65.6	18.2	3.708	7.536***
問3-5 簿記を理解するための専門用語が多い	154	55.2	23.4	3.422	4.433***
問3-6 勘定科目が難しい	153	44.4	28.1	3.183	1.895*
問3-11 簿記学習が企業の実務にどのように役立つのかわからない	152	62.5	21.7	3.526	5.402***

- 簿記特有の抽象的な用語体系（専門用語が多いこと、勘定科目が難しいこと）は簿記学習の主な障壁となると考えられている。
- 体験的な教育が実施しにくい特徴（問3-11）と内発的動機の弱さ（問3-2）も簿記離れの重要な原因だと考えられている。

第3章 簿記教育に関するアンケート調査結果の概要

2 第1部（問1～問11）回答の記述統計

	N	% (回答4, 5)	% (回答1, 2)	Mean	t-test (Mean=3)
学生の簿記好きの原因					
問4-1 企業活動の理解に役立つ	154	72.1	9.7	3.870	11.232***
問4-2 企業経営（企業管理）に役立つ	154	70.8	9.1	3.805	10.671***
問4-3 株式投資を行うための基礎知識の習得に役立つ	153	40.5	24.8	3.203	2.261*
問4-5 財務諸表分析（経営分析）の理解に役立つ	154	59.7	18.2	3.558	6.390***
問4-7 明確な解答が存在する	154	62.3	14.9	3.721	7.690***
問4-8 複式簿記一巡の手続きが整然としていること	154	47.4	24.0	3.331	3.458**

➤ これらの結果は、簿記の実用性や応用面（企業活動の理解などに役立つこと）に対する肯定的な評価は、簿記学習の動機を高める可能性を示唆している。

➤ 簿記の論理的構造と体系性（明確な解答、一巡の手続き）は、手順に従えば正解にたどり着けるという簿記学習の特徴に繋がっている。このような特徴は学習のハードルを下げる可能性がある。

第3章 簿記教育に関するアンケート調査結果の概要

2 第1部（問1～問11）回答の記述統計

	N	% (回答4, 5)	% (回答1, 2)	Mean	t-test (Mean=3)
簿記の範囲					
問5-1 日々の取引の記帳	153	94.1	0.7	4.758	37.898***
問5-2 決算整理	153	88.9	3.9	4.556	23.514***
問5-3 財務諸表の作成	154	79.2	10.4	4.175	13.437***
問5-4 連結財務諸表の作成	153	47.7	22.2	3.353	3.557**

➤ 全体として、回答者は設問に列挙された全ての項目が簿記の範囲に入ると認識していると言える。

第3章 簿記教育に関するアンケート調査結果の概要

2 第1部（問1～問11）回答の記述統計

	N	% (回答4, 5)	% (回答1, 2)	Mean	t-test (Mean=3)
簿記教育上、重要とされる項目について					
問8-1 簿記技術の習得	154	76.6	5.8	4.143	14.283***
問8-2 簿記理論の習得	154	78.6	7.1	4.078	14.031***
問8-3 資格取得	153	57.5	15.7	3.484	5.827***
問8-4 専門家の育成	154	47.4	23.4	3.286	3.187**

- 問8-5「(会計学)研究者を育成すること」は重要な項目と捉えられていない
- 簿記教育は実務的なスキルと職業的な資格の取得を主眼に置いている。

第3章 簿記教育に関するアンケート調査結果の概要

2 第1部（問1～問11）回答の記述統計

	N	% (回答4, 5)	% (回答1, 2)	Mean	t-test (Mean=3)
簿記講義において重視される項目について					
問9-1 日々の取引の記帳	154	84.4	1.3	4.455	22.307***
問9-2 財産管理（補助簿を含む）	154	60.4	12.3	3.721	8.562***
問9-3 決算整理（利益計算を含む）	154	88.3	1.9	4.429	23.685***
問9-4 財務諸表の作成	153	87.6	3.3	4.366	21.543***
問9-5 帳簿組織（伝票を含む）	153	50.3	21.6	3.425	4.456***

- 全体として、回答者は簿記講義において、設問に列挙された全ての項目を重視している。

第3章 簿記教育に関するアンケート調査結果の概要

2 第1部（問1～問11）回答の記述統計

	N	% (回答4, 5)	% (回答1, 2)	Mean	t-test (Mean=3)
利益計算について					
問10-1 簿記教育上の利益計算は損益法（収益費用観）を前提に行うべき	153	52.3	9.8	3.556	6.541***

➤ 回答者の過半数(52.3%)は、簿記教育上の利益計算は損益法(収益費用観)を前提に行うべきであると賛成している。

	N	% (回答4, 5)	% (回答1, 2)	Mean	t-test (Mean=3)
問11 会計基準の改訂が簿記教育に与えてきた影響について	153	69.9	6.5	3.915	11.970***

➤ 回答者の過半数(69.9%)は、「会計ビッグバン」(1997年)以降の会計基準の改訂が、簿記教育に有意な影響があると認識している。

第3章 簿記教育に関するアンケート調査結果の概要

3 デモグラフィック変数の記述統計

	Total (%)	簿記教育に対する満足度			Pearson χ^2 (Sig.)
		不満 (回答1, 2) (%)	中立 (回答3) (%)	満足 (回答4, 5) (%)	
教育年数					
20年以下	67 (43.50%)	4 (6.00%)	35 (52.20%)	28 (41.80%)	9.208 (0.01)
21年以上	85 (55.20%)	20 (23.50%)	32 (37.60%)	33 (38.80%)	
Missing	2 (1.30%)	1 (50.00%)	1 (50.00%)	0 (0.00%)	
Total	154	25 (16.20%)	68 (44.20%)	61 (39.60%)	

- 教育年数が短い(20年以下)と長い(21年以上)回答者の間に、満足度には統計的に有意な差がある($\chi^2 = 9.208$, $p < 0.05$)。
- 他のデモグラフィック特徴(性別, 年齢, 勤務地域, 職種, 専門領域など)については、異なるグループの間に、簿記教育に対する満足度に統計的に有意な差がない($p > 0.1$)。
- 簿記離れの心配度については、全てのデモグラフィック特徴では、異なるグループの間に、統計的に有意な差がない($p > 0.1$)。

第4章 簿記教育に対する満足度の考察

1 問題意識

- 本章では, RQ1「日本簿記学会の会員は簿記教育にどの程度満足しているのか。簿記教育の満足度に影響を与えている要因は何か。」に対する解を得るため, 単変量分析の結果およびその解釈を示す。

2 単変量分析の結果

- 簿記教育に対する満足度によって, 回答者を不満(回答1, 2), 中立(回答3), 満足(回答4, 5)という3つのグループに分ける。
- 3つのグループの間に, 各質問の回答に差があるかについて, Kruskal-Wallisテストを用いて検証した。
- Kruskal-Wallisテストで有意な違い($p < 0.1$)が示される質問について, グループごとの違いについて, Steel-Dwassテストを用いて検証した。

第4章 簿記教育に対する満足度の考察

図表4-1 「簿記教育の満足度」単変量分析

var		不満(回答1, 2)			中立(回答3)			満足(回答4, 5)			Kruskal-Wallis test			Steel-Dwass test					
														不満 vs.		中立 vs.		不満 vs.	
														中立		満足		満足	
		N	Mean	SD	N	Mean	SD	N	Mean	SD	Chi2	df	Sig.	z	Sig.	z	Sig.	z	Sig.
問3 学生の「簿記嫌い」の原因について																			
問3-6	勘定科目	25	2.400	1.225	68	3.294	1.185	60	3.383	1.075	10.998	2	0.004	2.894	0.011	0.455	0.892	3.195	0.004
問3-8	取引が多岐	25	2.440	1.325	68	2.765	1.148	58	3.276	1.005	10.804	2	0.005	1.114	0.506	2.718	0.018	2.700	0.019
問3-9	取引が難解	25	2.560	1.294	68	2.721	1.131	61	3.148	1.030	7.045	2	0.030	0.616	0.811	2.281	0.059	2.113	0.087
問4 学生の「簿記好き」の原因について																			
問4-1	企業活動の理解	25	3.600	1.000	68	3.706	1.023	61	4.164	0.800	9.310	2	0.010	0.659	0.787	2.600	0.025	2.476	0.035
問4-2	企業経営(企業管理)	25	3.680	0.852	68	3.632	0.991	61	4.049	0.865	6.879	2	0.032	0.038	0.999	2.425	0.041	1.841	0.156
問4-3	株式投資の基礎知識	25	3.080	1.256	67	2.925	1.119	61	3.557	0.940	9.624	2	0.008	0.425	0.905	3.072	0.006	1.741	0.190
問4-4	会計基準の理解	25	3.440	1.121	67	2.791	1.023	61	3.344	1.196	10.135	2	0.006	2.447	0.038	2.788	0.015	0.256	0.964
問4-5	財務諸表分析の理解	25	3.560	1.083	68	3.324	1.112	61	3.820	1.008	6.511	2	0.039	0.968	0.597	2.533	0.030	0.981	0.589
問4-6	課税所得の計算の理解	25	3.320	1.030	67	2.642	1.124	60	3.250	1.114	10.854	2	0.004	2.537	0.030	2.868	0.012	0.295	0.953
問4-8	一巡の手続きが整然	25	3.200	1.291	68	3.132	1.171	61	3.607	1.130	5.489	2	0.064	0.219	0.974	2.293	0.057	1.379	0.352
問5 簿記の範囲について																			
問5-2	決算整理	25	4.680	0.627	67	4.418	0.890	61	4.656	0.793	5.244	2	0.073	1.333	0.377	2.160	0.078	0.322	0.945
問6 簿記教育上の「簿記と会計の関係」について																			
No_2	共有	25	0.320	0.476	68	0.176	0.384	61	0.344	0.479	5.043	2	0.080	1.486	0.298	2.172	0.076	0.215	0.975
問9 簿記講義において重視される項目について																			
問9-2	財産管理	25	4.000	0.913	68	3.515	1.152	61	3.836	0.934	4.919	2	0.085	1.926	0.131	1.624	0.235	0.889	0.647
問9-3	決算整理	25	4.440	0.712	68	4.265	0.840	61	4.607	0.613	6.067	2	0.048	0.826	0.687	2.458	0.037	1.051	0.545
問9-5	帳簿組織	25	3.520	1.046	67	3.104	1.316	61	3.738	0.982	8.113	2	0.017	1.452	0.314	2.771	0.015	0.826	0.687
問10 利益計算について																			
問10-1	損益法(収益費用観)	25	3.080	1.187	68	3.471	1.058	60	3.850	0.899	8.621	2	0.013	1.302	0.394	2.028	0.106	2.725	0.018
問10-2	財産法(資産負債観)	25	2.520	0.963	68	2.824	0.880	60	3.117	0.993	5.620	2	0.060	1.201	0.452	1.559	0.264	2.162	0.078

第4章 簿記教育に対する満足度の考察

3 単変量分析の結果の要約

質問	満足度の高い人は 中立的な人に比べて強い	満足度の高い人は 低い人に比べて強い	意見
問3	(該当なし)	・勘定科目が難しいこと	簿記嫌いの原因である
	・簿記上の取引が多岐にわたっていること	・同左	
	・簿記上の取引が難解であること	・同左	
問4	・企業活動の理解に役立つこと	・同左	簿記好きの原因である
	・企業経営(企業管理)に役立つこと	(該当なし)	
	・株式投資に役立つこと	(該当なし)	
	・会計基準の理解に役立つこと	(該当なし)	
	・財務諸表分析の理解に役立つこと	(該当なし)	
	・課税所得計算の理解に役立つこと	(該当なし)	
	・簿記一巡の手続きが整然としていること	(該当なし)	
問6	・簿記と会計は範囲を共有している	(該当なし)	簿記と会計の関係
問5	・決算整理を簿記の範囲に含めること	(該当なし)	簿記の範囲および簿記教育上の重要な論点である
問9	・決算整理(利益計算を含む)を重視すること	(該当なし)	
	・帳簿組織(伝票を含む)を重視すること	(該当なし)	
問10	(該当なし)	・損益法を重視すること	簿記教育上の利益観
	(該当なし)	・財産法を重視すること	

第4章 簿記教育に対する満足度の考察

4 本章の結論

- 単変量分析の主な結果は以下のとおりである。
- 満足度に影響を与えている要因は,
 - ① 勘定科目や取引の複雑さといった簿記の性質に関することが簿記嫌いの原因と考えていること
 - ② 簿記に現代的意義を見出しており、ビジネスの理解に役立つことが簿記好きの理由と考えていること
 - ③ 財務分析の理解に役立つなど簿記の多様な役立ちを認識していること
 - ④ 簿記と会計は範囲を共有していると考えていること
 - ⑤ 決算整理を簿記の範囲だと捉え、かつ簿記教育上の重点項目と捉えていること
 - ⑥ 簿記固有の論点である帳簿組織を重視していること
 - ⑦ バックグラウンドにある利益計算の概念を大事に考えていること
- 学会へ提言したい:①簿記の難解さを解消するような教育技法の開発;②簿記の多様な役立ち(ビジネスや財務分析の理解など)を対外的に伝達すること;③簿記と会計の相互補完的な学習を意識した指導方法;④利益計算の概念といったファンダメンタルなトピックについても積極的に議論の場を設けること

第5章 学生の簿記離れに対する心配度の考察

1 問題意識

➤ 本章では、RQ2「日本簿記学会の会員は学生の簿記離れをどの程度心配しているのか。簿記離れの心配度に影響を与えている要因は何か。」に対する解を得るため、単変量分析の結果およびその解釈を示す。

2 単変量分析の結果

➤ 学生の簿記嫌い(簿記離れ)に対する心配度によって、回答者を心配なし(回答1, 2), 中立(回答3), 心配(回答4, 5)という3つのグループに分ける。

➤ 3つのグループの間に、各質問の回答に差があるかについて、Kruskal-Wallisテストを用いて検証した。

➤ Kruskal-Wallisテストで有意な違い($p < 0.1$)が示される質問について、グループごとの違いについて、Steel-Dwassテストを用いて検証した。

第5章 学生の簿記離れに対する心配度の考察

図表5-1 「簿記離れの心配度」単変量分析

質問		心配なし(回答1, 2)			中立(回答3)			心配(回答4, 5)			Kruskal-Wallis test			Steel-Dwass test					
														心配なし vs.		中立 vs.		心配なし vs.	
														中立		心配		心配	
		N	Mean	SD	N	Mean	SD	N	Mean	SD	Chi2	df	Sig.	z	Sig.	z	Sig.	z	Sig.
問3 学生の「簿記嫌い」の原因について																			
問3-1	検定簿記への依存	34	1.971	1.000	38	2.553	1.179	82	3.000	1.286	16.144	2	0.000	2.153	0.080	1.708	0.202	3.956	0.000
問3-2	簿記学習の目的や意義	34	2.706	1.219	38	2.974	1.305	82	3.817	1.056	22.884	2	0.000	0.891	0.646	3.317	0.003	4.318	0.000
問3-4	計算が煩雑	34	2.441	1.160	38	2.974	1.325	81	2.963	1.054	5.265	2	0.072	1.729	0.194	0.130	0.991	2.272	0.060
問3-7	用語が古い	34	2.618	1.181	38	3.395	1.175	82	3.037	1.281	6.511	2	0.039	2.588	0.026	1.372	0.355	1.586	0.252
問3-11	企業の実務に役立つ	34	3.206	1.343	36	3.250	1.339	82	3.780	1.019	6.215	2	0.045	0.103	0.994	1.993	0.114	2.047	0.101
問4 学生の「簿記好き」の原因について																			
問4-2	企業経営（企業管理）	34	3.765	0.955	38	3.526	1.059	82	3.951	0.845	4.998	2	0.082	1.134	0.493	2.197	0.072	0.885	0.650
問5 簿記の範囲について																			
問5-1	日々の取引の記帳	34	4.853	0.436	38	4.553	0.724	81	4.815	0.527	7.077	2	0.029	2.052	0.100	2.354	0.049	0.273	0.960
問8 簿記教育上、重要とされる項目について																			
問8-1	簿記技術の習得	34	4.382	0.922	38	3.737	1.178	82	4.232	0.879	8.188	2	0.017	2.647	0.022	2.221	0.068	1.126	0.498
問9 簿記講義において重視される項目について																			
問9-1	日々の取引の記帳	34	4.618	0.853	38	4.184	0.834	82	4.512	0.758	8.422	2	0.015	2.677	0.020	2.232	0.066	1.083	0.525
問9-2	財産管理	34	3.853	1.209	38	3.421	0.976	82	3.805	0.987	5.576	2	0.062	1.992	0.114	2.104	0.089	0.609	0.815
問9-3	決算整理	34	4.412	0.925	38	4.184	0.801	82	4.549	0.612	6.175	2	0.046	1.631	0.232	2.481	0.035	0.134	0.990
問9-5	帳簿組織	34	3.500	1.135	37	3.027	1.236	82	3.573	1.144	5.375	2	0.068	1.738	0.191	2.251	0.063	0.138	0.990
問11 会計基準の改訂による影響について																			
問11	基準改訂の影響	34	4.059	1.043	38	3.658	0.815	81	3.975	0.948	6.416	2	0.04	2.379	0.046	2.086	0.093	0.673	0.779

第5章 学生の簿記離れに対する心配度の考察

3 単変量分析の結果の要約

質問	心配度の高い人は 中立的な人に比べて	心配度の高い人は 心配度の低い人に比べて	意見
問3-1		検定簿記への依存度の高さを 簿記離れの要因と認識	簿記嫌いの原因
問3-2	簿記学習の目的や意義の分かりにくさを 簿記離れの要因と認識	同左	
問3-4		計算の煩雑さを簿記離れの要 因と認識する傾向にある	
問4-2	簿記の企業経営(企業管理)への役立ち を簿記好きの要因と認識する傾向が強い		簿記好きの原因
問5-1	日々の取引の記帳を簿記の範囲に含め ると認識する傾向が強い		簿記の範囲および簿記教 育上の重要論点
問8-1	簿記技術の習得を簿記教育上、重要と認 識する傾向が強い ^注		
問9-1	日々の取引の記帳を重要な内容と認識す る傾向が強い ^注		
問9-2	財産管理を重要な内容と認識する傾向に ある		
問9-3	決算整理を重要な内容と認識する傾向が 強い		
問9-5	帳簿組織を重要な内容と認識する傾向が 強い		
問11	会計基準の改訂による影響を大きいと認 識 ^注		会計基準の改訂による簿 記教育への影響

注: 心配度の低い人は中立的な人に比べて, 同様の傾向にある。

第5章 学生の簿記離れに対する心配度の考察

4 本章の結論

➤ 心配度の高い人が学生の簿記離れの要因として認識している可能性の強い項目に以下のものが考えられる：

①検定簿記への依存の高さ

②簿記学習の目的や意義のわかりにくさ

③簿記の計算の煩雑さ

➤ ①に関しては、簿記教育上、検定試験に依存し過ぎることの弊害を指摘する意見がある一方で、これらが学生の学習上の達成度の可視化や学生のモチベーションの向上に寄与していることをポジティブに評価している会員も存在している。

➤ ③に関しては、確かに心配度の高い人にとって簿記離れの要因と捉えられているが、一方で簿記好きの要因にもなっている。

➤ ①と③は、一面では簿記離れの要因になっているが、別の面からみると簿記好きの要因にもなっているのであり、これらのバランスをどのように取っていくかは、今後も考え続けなければならない課題であろう。

➤ ②に関しては、克服しなければならない大きな課題であるといえる。この点については、実社会で果たしている簿記の役割等や簿記の取引分析能力の効果、さらには簿記の応用可能性を学生のみならず、社会に対して地道に伝え続けることしかないであろう。

第6章 簿記教育上の簿記と会計の関係に関する考察

1 簿記教育上の「簿記と会計の関係」

図表6-1 教育上の「簿記と会計の関係」についての回答の分布

選択肢		件数	%
1. 独立	簿記と会計は完全に独立した領域である	1	0.6
2. 共有	簿記と会計には重なる部分が存在するが、それぞれに独自の領域もある	41	26.6
3. 内包(a)	簿記は会計に内包されている	96	62.3
4. 内包(b)	会計は簿記に内包されている	13	8.4
5. どれにも当てはまらない		3	1.9
合計		154	100

第6章 簿記教育上の簿記と会計の関係に関する考察

2 教育上の簿記と会計の関係に関する単変量分析の結果

➤ 教育上の簿記と会計の関係に対して異なる見解を持つグループ(共有, 内包(a), 内包(b))の間, 教育教育上重視する項目(問8), 簿記講義の内容(問9), 利益観(問10), および会計基準改訂が簿記教育に与える影響(問11)に違いがあるかを検証した。

注:「5. どれにも当てはまらない」は分析から除外した。また,「1. 独立」は, 選択した回答者が1人だけであるため, 分析から除外した。

図表6-2 教育上の簿記と会計の関係についての単変量分析

var		共有(回答2)			内包(a)(回答3)			内包(b) (回答4)			Kruskal-Wallis test			Steel-Dwass test					
														共有 vs.		内包(a) vs.		共有 vs.	
														内包(a)		内包(b)		内包(b)	
		N	Mean	SD	N	Mean	SD	N	Mean	SD	Chi2	df	Sig.	z	Sig.	z	Sig.	z	Sig.
問8 簿記教育上, 重要とされる項目について																			
問8-2	簿記理論の習得	41	4.220	0.791	96	3.917	1.023	13	4.615	0.650	7.848	2	0.02	1.473	0.304	2.574	0.027	1.693	0.208
問9 簿記講義において重視される内容について																			
問9-2	財産管理	41	4.049	0.947	96	3.552	1.045	13	4.077	0.862	8.054	2	0.018	2.498	0.033	1.795	0.171	0.032	0.999
問11 会計基準の改訂による影響について																			
問11	基準改訂の影響	41	3.927	0.932	95	3.842	0.949	13	4.462	0.776	5.43	2	0.066	0.484	0.879	2.311	0.054	1.911	0.135

第6章 簿記教育上の簿記と会計の関係に関する考察

図表6-3 教育上の簿記と会計の関係について単変量分析結果のまとめ

質問	簿記の固有性を強調するグループ		解釈
	共有は	内包(b)は	
問8-2「簿記技術を支える理論を習得させること」		内包(a)よりも強く重視する	⇒ 簿記の固有性と包括性を最も強調する内包(b)の回答者は、内包(a)の回答者に比べて、簿記理論の習得をより重視する
問9-2「財産管理(補助簿を含む)」	内包(a)よりも強く重視する	平均値が内包(a)より高い、ただし、有意ではない	⇒ 簿記は財務諸表の作成に資するだけではなく、証憑に裏付けられる取引の事実を記録することや財産管理のための情報提供においても重要な役割を担っている。 後者の機能には、補助簿の作成が不可欠である(原 2023)。 ゆえに、簿記の固有性を強調する人(共有と内包(b))は補助簿をより重視する傾向にある。
問11「「会計ビッグバン」(1997年)以降の会計基準の改訂が、簿記教育に与えてきた影響」		内包(a)よりも大きいと認識している	⇒ 簿記の独自性や伝統的構造を重視する内包(b)の回答者は、会計基準のパラダイム転換(公正価値測定を導入、および連結財務諸表(会計の情報提供機能)重視への移行など)により強い影響や違和感を覚えている可能性がある。

【参考文献等】

原俊雄. 2023. 「財務報告の展開と簿記教育」 『簿記研究』 6(2), 20-27.

Ⅲ 簿記研究に関するアンケート調査の分析

第7章 簿記研究に関するアンケート調査結果の概要および考察

1 サンプルの選択

・本調査の回答総数は161件であった。本調査への協力に「同意しない」等を除き、本分析では、155件の回答をサンプルサイズとして用いた。

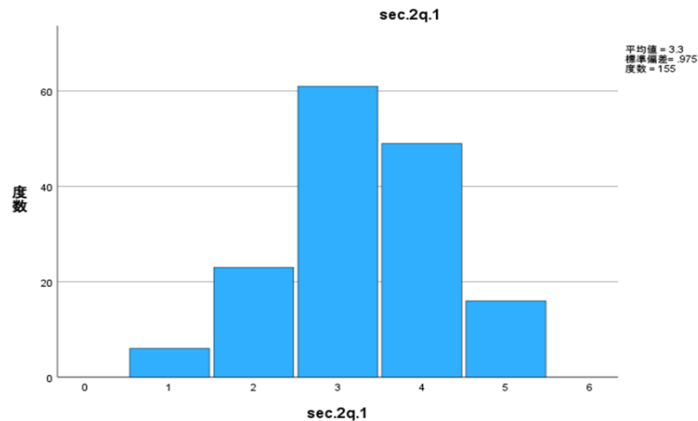
サンプルサイズ	
回答総数	161 件
「同意しない」または空欄	5 件
第2部問1～問2の欠損値	1 件
分析に使用するサンプルサイズ	155 件

→本統計解析にあたっては、統計ソフトIBM SPSS Statistics30を使用。

第7章 簿記研究に関するアンケート調査結果の概要および考察

2 第2部（問1～問11）回答の記述統計

日本簿記学会会員は簿記研究にどの程度満足しているか

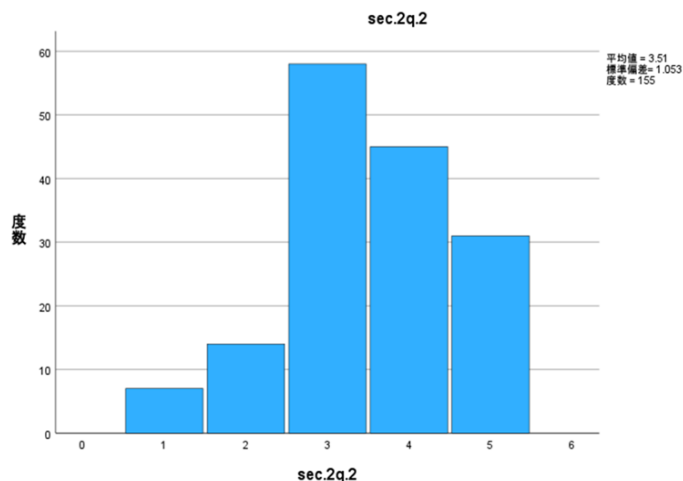


設問	N	Mean	SD	Min	Med	Max
問1 簿記研究の満足度	155	3.297	0.975	1	3	5

満足度カテゴリー：

満足度が低い：度数29（18.71%），中立：度数61（39.35%），満足度が高い：度数65（41.94%）

日本簿記学会会員は簿記研究離れをどの程度心配しているか



設問	N	Mean	SD	Min	Med	Max
問2 簿記研究離れの心配度	155	3.510	1.053	1	3	5

心配度カテゴリー：

心配度が低い：度数21（13.55%），中立：度数58（37.42%），心配度が高い：度数76（49.03%）

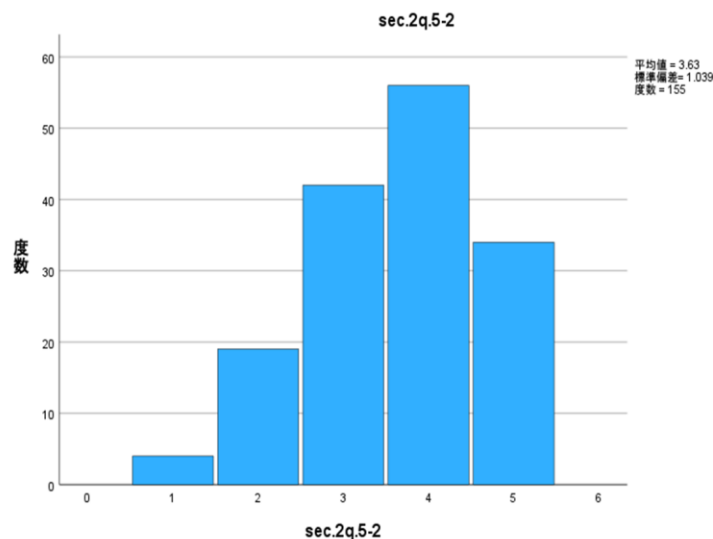
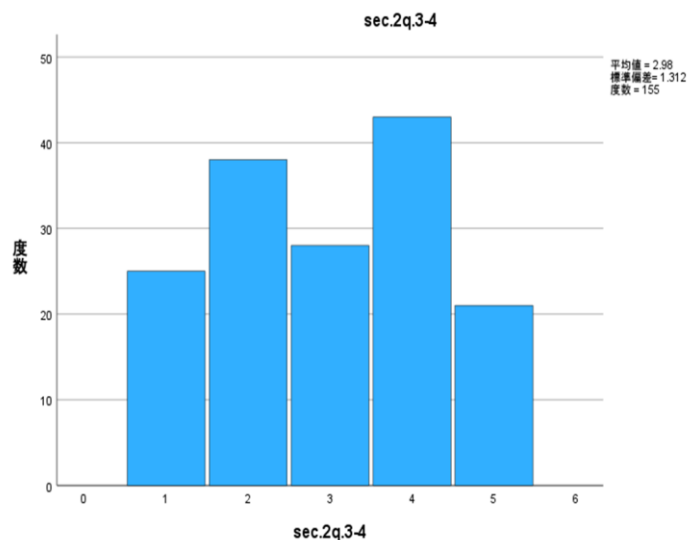
第7章 簿記研究に関するアンケート調査結果の概要および考察

2 第2部（問1～問11）回答の記述統計

□問3から問6に関する記述統計

→第2部問3から問6に関する記述統計については、図表7-4に示している。

→記述統計より、会員によって意見が分かれている問い（たとえば、下左図問3-4など）、一方で会員によって意見の差が少ない問い（たとえば、下右図問5-2など）があることがわかる。



第7章 簿記研究に関するアンケート調査結果の概要および考察

2 第2部（デモグラフィック）回答の記述統計

→デモグラフィック変数の χ 二乗検定を行った。図表7-5および図表7-6参照。

- ・簿記研究の満足度に関して

→ χ 二乗検定の結果、「勤務地域」と「職歴」において、有意な差がみられた。

→勤務地域に関しては、「東京都」か「東京都以外」かで簿記研究に対する満足度に差異がみられた。「東京都」勤務の会員は、満足度が高い割合が比較的低いものに対して、「東京都以外」に勤務する会員は、相対的に満足度が高い傾向を示した。職歴に関しては、大学教員履歴のある会員では中立的な回答が多かったのに対して、高校教員履歴のある会員では満足度が高い傾向を示した。

- ・簿記研究離れの心配度に関して

→ χ 二乗検定の結果、簿記研究年数によって「簿記研究離れに対する心配度」に有意な差がみられた。

→簿記研究歴が21年以上の比較的ベテラン層からなる会員では、「心配度が高い」とする回答が65.3%に上ったのに対し、20年以下の比較的若手層からなる会員では41.9%にとどまり、「中立（42.9%）」が最も多かった。この差は、研究歴が長い会員ほど、簿記研究の将来や存続に懸念を抱いている可能性を示している。

第7章 簿記研究に関するアンケート調査結果の概要および考察

3 簿記研究に関する単変量分析

→ノンパラメトリック検定（Kruskal-Wallis検定）の目的は、3つのカテゴリーの分布の中心位置が異なるかどうかである。また各カテゴリーの比較にはSteel-Dwass法により多重比較を行い、各カテゴリー間のすべての組み合わせで、中心位置に差があるかどうかを検定している。

→本統計解析にあたっては、統計ソフトIBM SPSS Statistics30を使用し、ノンパラメトリック検定（Kruskal-Wallis検定）を行っている。また多重比較（Steel-Dwass法）を行う際には、統計ソフトEZR（Easy R）を使用した。

- ・本検定にかかる仮説

帰無仮説H0：3つのカテゴリーの分布の中心位置は等しい。

対立仮説H1：3つのカテゴリーの分布の中心位置は異なる。

* 簿記研究の満足度に関する単変量分析結果は図表7-7参照。

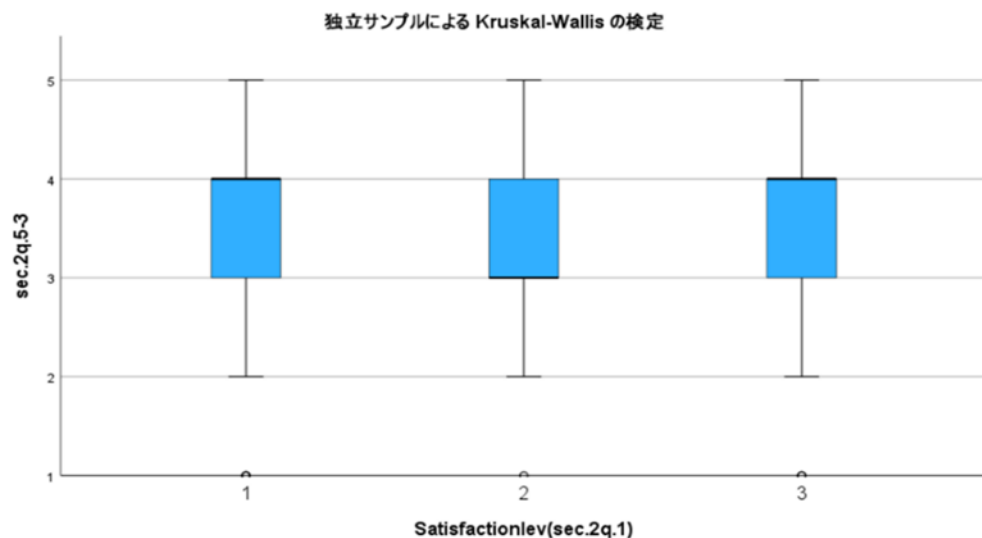
* 簿記研究離れの心配度に関する単変量分析結果は図表7-13参照。

第7章 簿記研究に関するアンケート調査結果の概要および考察

3 簿記研究に関する単変量分析

□ 簿記研究の満足度に関する単変量分析結果

- ・ 簿記研究の満足度カテゴリーと問4「簿記研究の説明に関する評価」の検証
→問4-6は帰無仮説を棄却した。
- ・ 簿記研究の満足度カテゴリーと問5「簿記研究の成果に関する評価」の検証



→問5-1, 問5-3, 問5-4,
問5-5は帰無仮説を棄却した。

例) 左図「問5-3 簿記研究の成果が会計基準の設定に役立つ」。

- ・ 簿記研究の満足度カテゴリーと問6「簿記の説明に関する評価」の検証
→問6-1, 問6-2, 問6-4は帰無仮説を棄却した。

第7章 簿記研究に関するアンケート調査結果の概要および考察

3 簿記研究に関する単変量分析

□ 簿記研究の満足度に関する単変量分析まとめ

質問	満足度が高い人は 中立的な人に比べて	満足度が高い人は 低い人に比べて
問5	・ 簿記教育	
	・ 会計基準の設定	・ 同左
	・ 会計教育	・ 同左
	・ 会計研究	・ 同左
問6	(該当なし)	・ 簿記は、時価主義と親和性が高い
		・ 簿記は、情報提供機能と親和性が高い

質問	満足度が低い人は 高い人に比べて	満足度が低い人は 中立的な人に比べて
問4	(該当なし)	・ 簿記研究は、会計研究に比べて、国際研究が少ない
問6	(該当なし)	・ 簿記は、取得原価主義と親和性が高い

→ 簿記研究の満足度が高い人は、満足度の中立的な人、満足度の低い人に比べて、簿記研究の成果が、「会計基準の設定」「会計教育」「会計研究」に役立っていることが、会員の簿記研究の満足度に寄与していると考えている。

→ 簿記研究の満足度が高い人は、満足度の低い人に比べて、「簿記は、時価主義と親和性が高い」こと、「簿記は、情報提供機能と親和性が高い」ことが、簿記研究における重要な論点であると考えている。

➤ 簿記研究に対する満足度が高い人は、簿記における時価による測定の意義や情報提供を目的とした会計との関連性を重視しており、拡張された会計測定を肯定的にとらえていると考えられる。一方、簿記研究の満足度が低い人は、伝統的に用いられている取得原価による測定を重視していると考えられる。

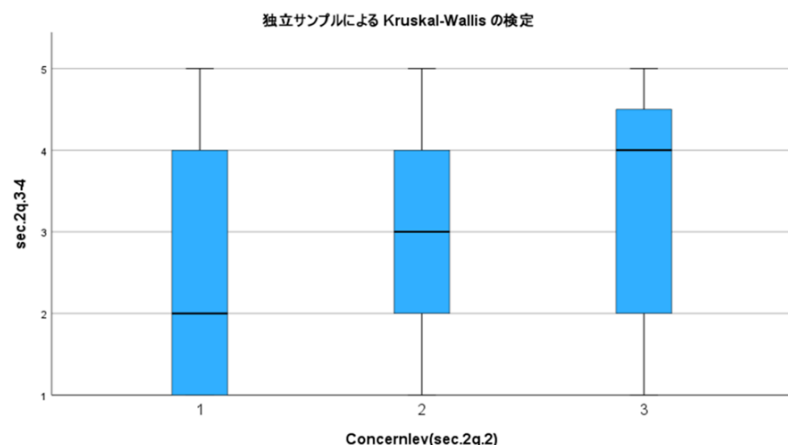
第7章 簿記研究に関するアンケート調査結果の概要および考察

3 簿記研究に関する単変量分析

□ 簿記研究離れの心配度に関する単変量分析結果

- ・ 簿記研究離れの心配度カテゴリーと問3「簿記研究離れ」に関する検証

→ 問3-2と問3-4は帰無仮説を棄却した。



例) 「問3-4 資格試験への依存が強く、研究の対象にしにくいこと」において、中立カテゴリーー心配度が高いカテゴリーの中心位置の差は $p=0.030$ で、 0.1 より小さい値を示しており、有意である。

- ・ 簿記研究離れの心配度カテゴリーと問5「簿記研究の成果に関する評価」の検証

→ 「問5-4 簿記研究の成果が会計教育に役立つ」は帰無仮説を棄却した。

- ・ 簿記研究離れの心配度カテゴリーと問4「簿記研究の説明に関する評価」および、問6「簿記の説明に関する評価」の検証

→ 各問いは帰無仮説を棄却できなかった。

第7章 簿記研究に関するアンケート調査結果の概要および考察

3 簿記研究に関する単変量分析

□ 簿記研究離れの心配度に関する単変量分析まとめ

質問	心配度が高い人は 中立的な人に比べて	心配度が高い人は 低い人に比べて
問3	・簿記研究の目的や意義がわかりにくいこと	(該当なし)
	・資格試験への依存が強く、研究の対象にしにくいこと	・同左

→ 簿記研究離れの心配度が高い人は、心配度の中立的な人、心配度の低い人に比べて、「資格試験への依存が強く、研究の対象にしにくい」ことが簿記研究離れの要因になると考えている。また、簿記研究離れの心配度が高い人は、心配度の中立的な人に比べて、「簿記研究の目的や意義がわかりにくいこと」が簿記研究離れの要因になると考えている。

➤ 簿記の資格試験は、簿記学習の効果測定としての機能は果たしているが、その反面、簿記を研究の対象にしにくくしている。また、簿記を研究対象とする目的や意義が、学会員の間で共有されていない可能性があるのではないか。

第7章 簿記研究に関するアンケート調査結果の概要および考察

4 結論

RQ1:日本簿記学会の会員は、簿記研究にどの程度満足しているか。

➤満足している会員は比較的多く、簿記研究の成果が、簿記教育、会計基準の設定、会計教育、会計研究に役立っていることがその満足度に寄与している。

RQ2:日本簿記学会の会員は、簿記研究離れをどの程度心配しているか。

➤簿記研究の目的・意義のわかりにくさや、資格試験への依存によって研究の対象になりにくいといった点が心配度を高めており、多くの会員が簿記研究離れを心配している。

本分析の結果から、簿記研究の満足度の高さは、簿記研究の成果が簿記教育、会計基準の設定、会計教育、会計研究に対して有用であるとの認識に起因していることが明らかになった。一方、簿記研究離れの心配度の高さは、簿記研究の目的や意義のわかりにくさ、資格試験への依存に起因していることが明らかになった。

第8章 簿記研究に関するアンケート調査に関する追加分析

1 追加分析の概要

→簿記研究グループに与えられたRQ1からRQ3に関して、追加分析を行い、検証する。具体的には、簿記研究に関するアンケート内容について、相関分析及び主成分分析、回帰分析を用いて、統計解析した。

→本分析では、前章のサンプル選択で示した簿記学会会員から収集した回答155件の回答をサンプルサイズとして用いた。本統計解析にあたっては、統計ソフトIBM SPSS Statistics30を使用した。

第8章 簿記研究に関するアンケート調査に関する追加分析

2 相関分析

□簿記研究の満足度との相関分析

設問		問1	問4-6	問5-1	問5-3	問5-4	問5-5	問6-1	問6-2	問6-4
問1 簿記研究の満足度	相関係数	--								
	有意確率 (両側)									
	度数	155								
問4-6 簿記研究は、国際研究が少ない	相関係数	-0.048	--							
	有意確率 (両側)	0.553								
	度数	153	153							
問5-1 簿記教育	相関係数	.224**	-0.054	--						
	有意確率 (両側)	0.005	0.506							
	度数	155	153	155						
問5-3 会計基準の設定	相関係数	.267**	-0.050	.429**	--					
	有意確率 (両側)	0.001	0.537	0.000						
	度数	154	152	154	154					
問5-4 会計教育	相関係数	.275**	-0.014	.594**	.497**	--				
	有意確率 (両側)	0.001	0.867	0.000	0.000					
	度数	155	153	155	154	155				
問5-5 会計研究	相関係数	.339**	0.000	.393**	.506**	.574**	--			
	有意確率 (両側)	0.000	0.998	0.000	0.000	0.000				
	度数	155	153	155	154	155	155			
問6-1 簿記は、取得原価主義と親和性が高い	相関係数	.163*	0.088	0.047	0.093	0.049	-0.002	--		
	有意確率 (両側)	0.043	0.282	0.564	0.253	0.544	0.976			
	度数	154	153	154	153	154	154	154		
問6-2 簿記は、時価主義と親和性が高い	相関係数	.212**	-0.018	0.103	.275**	.178*	.195*	0.072	--	
	有意確率 (両側)	0.008	0.821	0.202	0.001	0.027	0.015	0.372		
	度数	154	153	154	153	154	154	154	154	
問6-4 簿記は、情報提供機能と親和性が高い	相関係数	.179*	-0.147	0.098	.283**	.199*	.295**	.190*	.222**	--
	有意確率 (両側)	0.026	0.070	0.228	0.000	0.013	0.000	0.018	0.006	
	度数	154	153	154	153	154	154	154	154	154

→単変量分析で結果が得られた各設問と簿記研究の満足度（「問1 簿記研究にどの程度満足しているか」の「全く満足していない」から「非常に満足している」の5段階評価の回答）に関する相関分析（Spearmanの順位相関）を行った。

→相関係数に関して，**は1%水準で有意（両側）（ $p < 0.01$ ）であり，*は5%水準で有意（両側）（ $p < 0.05$ ）である。

第8章 簿記研究に関するアンケート調査に関する追加分析

2 相関分析

□ 簿記研究の満足度との相関分析の結果

→第一に、簿記研究の満足度と、簿記研究の説明に関する問4-6との間には有意な相関は認められなかった。

→第二に、簿記研究の満足度と、問5「簿記研究の成果」が何に役立つのかという各設問との間には、問5-1「簿記教育」は弱い正の相関 ($r=.224^{**}$)、問5-3「会計基準」は弱い正の相関 ($r=.267^{**}$)、問5-4「会計教育」は弱い正の相関 ($r=.275^{**}$)。問5-5「会計研究」は中程度の正の相関 ($r=.339^{**}$)。

→第三に、簿記研究の満足度と、問6「簿記研究の説明」における回答との間には、問6-1「取得原価主義との親和性」は弱い正の相関 ($r=.163^{*}$)、問6-2「簿記は、時価主義との親和性」は弱い正の相関 ($r=.212^{**}$)、問6-4「簿記は、情報提供機能との親和性」は弱い正の相関 ($r=.179^{*}$)。

・ 結果の考察

➤ 簿記研究の成果が簿記・会計の基礎的な要素に波及することが、簿記研究の満足度を高める可能性があると考えられる。

➤ 簿記研究が取得原価主義会計、時価の記録・開示、情報提供といった研究対象範囲を包括的に扱っていると認識されることが、研究への満足度を高める可能性を示唆している。すなわち、簿記が持つ多面的な側面への理解と探求が、会員の簿記研究の満足度向上に寄与するものと考えられる。

第8章 簿記研究に関するアンケート調査に関する追加分析

2 相関分析

□ 簿記研究離れの心配度との相関分析

設問		問2	問3-2	問3-4	問5-4
問2 簿記研究離れの 心配度	相関係数	--			
	有意確率 (両側)				
	度数	155			
問3-2 簿記研究の目的や 意義がわかりにく い	相関係数	.167*	--		
	有意確率 (両側)	0.038			
	度数	155	155		
問3-4 資格試験への依存 が強く、研究の対 象にしにくい	相関係数	.227**	.275**	--	
	有意確率 (両側)	0.005	0.001		
	度数	155	155	155	
問5-4 会計教育	相関係数	0.151	-.169*	-0.045	--
	有意確率 (両側)	0.061	0.035	0.578	
	度数	155	155	155	155

→単変量分析で結果が得られた各設問と簿記研究離れの心配度（「簿記研究離れをどの程度心配しているか」の「全く心配していない」から「非常に心配している」の5段階評価の回答）に関する相関分析（Spearmanの順位相関）を行った。

→相関係数に関して，**は1%水準で有意（両側）（ $p < 0.01$ ）であり，*は5%水準で有意（両側）（ $p < 0.05$ ）である。

第8章 簿記研究に関するアンケート調査に関する追加分析

2 相関分析

□簿記研究離れの心配度との相関分析の結果

→第一に、簿記研究離れの心配度と、問3「簿記研究離れの原因」における各設問との間には、問3-2「簿記研究の目的や意義がわかりにくいこと」は弱い正の相関 ($r=.167^*$)。また、問3-4「資格試験への依存が強く、研究の対象にしにくいこと」は弱い正の相関 ($r=.227^{**}$)。

→第二に、簿記研究離れの心配度と、問5-4「簿記研究の成果が会計教育に役立つ」との間には有意な相関は認められなかった。

・結果の考察

➤簿記研究離れの心配度が高い人ほど、簿記研究の目的や意義のわかりにくさや、資格試験への依存傾向による研究対象のしにくさが要因となって、簿記研究離れにつながると考えている傾向にあることが示唆される。

➤「簿記研究の目的や意義がわかりにくいこと」が「簿記研究の成果が会計教育に役立つ」こととの関係において負の相関が示されている。これは、簿記研究離れの原因としての簿記研究の目的や意義のわかりにくさが低下すれば、簿記研究の成果が会計教育に役立つとの考えが高まると考えられる。つまり、簿記研究の意図や方向性を明確にすることで、その成果が会計教育に活かされる可能性が高まると考えられる。

第8章 簿記研究に関するアンケート調査に関する追加分析

3 主成分分析

→主成分分析は、観測されたいくつかの変数を合成して、データのもつ情報を説明できる新たな次元を探り出す手法である（村瀬ほか（2007））。

→問3から問6までの設問の回答から得られた変数に基づいて主成分分析を行い、**7つの主成分**が抽出された。

第8章 簿記研究に関するアンケート調査に関する追加分析

3 主成分分析

□主成分分析の結果

変数	第1主成分	第2主成分	第3主成分	第4主成分	第5主成分	第6主成分	第7主成分
問5-4 会計教育	0.756	0.029	0.194	0.26	0.127	0.036	0.156
問5-5 会計研究	0.729	0.196	0.044	0.088	0.022	-0.265	-0.046
問5-3 会計基準の設定	0.672	0.233	0.176	0.075	-0.026	0.086	-0.17
問5-1 簿記教育	0.652	0.103	0.11	0.477	0.062	0.16	0.097
問3-2 簿記研究の目的や意義がわかりにくい	-0.547	0.293	0.368	0.116	-0.023	0.357	-0.077
問3-1 簿記研究のニーズがないこと	-0.545	0.243	0.365	0.19	0.157	0.122	-0.075
問5-2 実務における帳簿作成や取引の記帳	0.532	-0.012	-0.037	0.514	0.247	0.018	0.049
問6-5 簿記は、国際財務報告基準（IFRS）と親和性が高い	0.451	0.356	0.216	-0.301	-0.291	-0.142	-0.258
問4-2 簿記研究は、より帳簿に関係している	-0.188	0.578	-0.357	0.184	0.253	-0.18	-0.33
問6-2 簿記は、時価主義と親和性が高い	0.302	0.552	0.247	-0.249	-0.19	-0.065	-0.197
問4-1 簿記研究は、より仕訳に関係している	-0.194	0.527	-0.279	0.377	-0.065	0.076	-0.274
問4-3 簿記研究は、より財産管理に関係している	-0.181	0.525	-0.588	0.021	-0.232	0.058	0.095
問3-3 簿記研究の方法論が確立されていない	-0.456	0.324	0.505	0.116	0.065	-0.027	-0.152
問6-4 簿記は、情報提供機能と親和性が高い	0.469	0.225	0.042	-0.555	-0.056	0.147	-0.04
問6-3 簿記は、利害調整機能と親和性が高い	0.137	0.107	-0.231	-0.447	0.545	0.291	-0.055
問6-1 簿記は、取得原価主義と親和性が高い	0.166	0.361	-0.112	-0.261	0.462	0.418	0.233
問4-6 簿記研究は、国際研究が少ない	-0.198	0.252	-0.006	0.123	0.462	-0.395	0.186
問4-5 簿記研究は、歴史研究が多い	-0.121	0.173	0.186	-0.286	0.307	-0.624	0.142
問4-4 簿記研究は、より利益計算に関係している	-0.029	0.5	-0.272	0.034	-0.388	-0.075	0.569
問3-4 資格試験への依存が強く、研究の対象にしにくい	-0.152	0.38	0.481	-0.015	-0.072	0.101	0.488
固有値	3.811	2.352	1.675	1.639	1.331	1.156	1.076
寄与率	19.053	11.761	8.376	8.197	6.654	5.779	5.38
累積寄与率	19.053	30.814	39.19	47.386	54.04	59.82	65.2

第1主成分

「簿記研究の役立ち」

第2主成分

「簿記の管理機能」

第3主成分

「簿記研究の難しさ」

第4主成分

「簿記の教育実務思考」

第5主成分

「伝統型会計目的」

第6主成分

「簿記研究の内容の偏り」

第7主成分

は「簿記の計算への依存」
を示す指標

第8章 簿記研究に関するアンケート調査に関する追加分析

4 回帰分析

□ 「簿記研究の満足度」 の回帰分析

モデル	非標準化係数	標準誤差	標準化係数 (β)	t 値	有意確率
(定数)	3.299	0.075		44.075	<.001
簿記研究 PCAscore1	0.404	0.075	0.411	5.379	<.001
簿記研究 PCAscore2	0.093	0.075	0.094	1.233	0.22
簿記研究 PCAscore3	-0.037	0.075	-0.038	-0.493	0.623
簿記研究 PCAscore4	-0.089	0.075	-0.091	-1.189	0.236
簿記研究 PCAscore5	0.041	0.075	0.042	0.545	0.587
簿記研究 PCAscore6	0.102	0.075	0.104	1.36	0.176
簿記研究 PCAscore7	0.076	0.075	0.078	1.017	0.311
R^2	0.206				
調整済み R^2	0.165				
F 統計量	5.042				

→モデル全体の決定係数は0.206であり、調整済み決定係数は0.165であった（ $F(7, 147) = 5.042, p < 0.001$ ）
 →本研究のモデルが従属変数（目的変数）の変動の20.6%を説明できる
 →主成分1の非標準化回帰係数は0.404（ $p < 0.001$ ）であり、統計的に有意な正の影響。

→本分析では主成分1（ $\beta = 0.411$ ）が従属変数に対して最も強い影響力

➤簿記研究の満足度に対して、とくに「会計教育」、「会計研究」、「会計基準の設定」、「簿記教育」、「実務における帳簿作成や取引の記帳」、「国際財務報告基準（IFRS）と親和性」、「情報提供機能と親和性」などの変数から構成されており、簿記研究の役立ちに関する研究を充実させることにより、会員の簿記研究の満足度が高まると考えられる。

（RQ1）

第8章 簿記研究に関するアンケート調査に関する追加分析

4 回帰分析

□ 「簿記研究離れの心配度」 の回帰分析

モデル	非標準化係数	標準誤差	標準化係数 (β)	t 値	有意確率
(定数)	3.535	0.083		42.546	<.001
簿記研究 PCAscore1	-0.075	0.083	-0.073	-0.895	0.373
簿記研究 PCAscore2	0.174	0.083	0.17	2.089	0.039
簿記研究 PCAscore3	0.162	0.083	0.159	1.948	0.054
簿記研究 PCAscore4	0.1	0.083	0.097	1.196	0.234
簿記研究 PCAscore5	0.042	0.083	0.041	0.506	0.614
簿記研究 PCAscore6	-0.045	0.083	-0.044	-0.535	0.593
簿記研究 PCAscore7	0.163	0.083	0.159	1.952	0.053
R^2	0.098				
調整済み R^2	0.051				
F 統計量	2.106				

→モデル全体の決定係数は0.098であり，調整済み決定係数は0.051であった（ $F(7, 147) = 2.106, p < 0.05$ ）

→本研究のモデルが従属変数（目的変数）の変動の9.8%を説明できる

→主成分2の非標準化回帰係数は0.174（ $p < 0.05$ ）であり，統計的に有意な正の影響。

→本分析では主成分2（ $\beta = 0.17$ ）が従属変数に対して最も強い影響力

➤簿記研究離れの心配度に対して，簿記の管理機能が影響していると考えられる。また，簿記の計算への依存，簿記研究の難しさの成分も少なからず影響を与えている。こうした成分の構成を考えると，仕訳，帳簿，利益計算といった簿記の特徴が簿記研究離れの心配度に影響を与えていると考えられる。（RQ2）

第8章 簿記研究に関するアンケート調査に関する追加分析

5 結論

RQ1:日本簿記学会の会員は、簿記研究の満足度に影響を与えている要因は何か。

➤簿記研究の成果が会計教育、会計研究、会計基準の設定、簿記教育、実務における帳簿作成や取引の記帳に役立つ、そして簿記が国際財務報告基準、情報提供機能との親和性の高さ、いわゆる簿記研究の役立ちの成分が影響を与えている。

RQ2:日本簿記学会の会員は、簿記研究離れの心配度に影響を与えている要因は何か。

➤簿記研究が帳簿や仕訳、財産管理に関係、時価主義と親和性という管理の簿記機能の成分、簿記研究の方法論や資格試験への依存性という簿記の難しさの成分、また簿記研究は利益計算、資格試験における計算の依存という簿記の計算への依存の成分が影響を与えている。

第8章 簿記研究に関するアンケート調査に関する追加分析

5 結論

RQ 3:日本簿記学会の会員は、簿記研究の成果をどのように捉えているのか。

➤ 簿記研究の成果を簿記・会計の基礎と捉えている。簿記研究の成果と会計目的（利害調整、情報提供）、そして会計測定（取得原価主義、時価主義）との関連性を示している。

RQ 3:日本簿記学会の会員は、簿記研究の成果は、簿記研究の満足度や簿記研究離れの心配度に影響を与えているのか。

➤ 簿記研究の目的・意義のわかりにくさが低下すれば、簿記研究の成果は会計教育に貢献する。

簿記研究の満足度に関しては、簿記研究の役立ちが会員の簿記研究の満足度を高める要因であること、一方、簿記研究離れの心配度に関しては、簿記の特徴や簿記の計算、難しさが簿記研究離れの心配度を高める要因であることが明らかになった。さらに、会員の簿記研究の満足度や簿記研究離れの心配度に対して、簿記研究の目的・意義のわかりにくさが低下すれば、簿記研究の成果は会計教育に貢献することが考えられる。

【参考文献】 第7・8章

- 内田治. 2014. 『SPSSによるノンパラメトリック検定』 オーム社.
- 神田善伸. 2024. 『フリー統計ソフトEZR (Easy R) で誰でも簡単統計解析 (改訂第2版)』 南江堂.
- 角ヶ谷典幸. 2022. 「簿記と会計の関係性と (学際的) 簿記研究の可能性」 『簿記研究』 5(1), 1-8.
- Tsunogaya, N., Sugahara, S., and P. Chand. 2017. The Impact of Social Influence Pressures, Commitment, and Personality on Judgments by Auditors: Evidence from Japan. *Journal of International Accounting Research*, 16 (3): 17–34.
<https://doi.org/10.2308/jiar-51761>
- 中野常男編著. 2007. 『複式簿記の構造と機能－過去・現在・未来－』 同文舘出版.
- 村瀬洋一, 高田洋, 廣瀬毅士編. 2007. 『SPSSによる多変量解析』 オーム社.

IV 結論

第9章 総括と課題

1 総括

- 第1章は、中間報告書で示したアンケート調査に基づく現代簿記論の研究内容をより詳細に検討するために、主として第1章の図表1-1のとおり、RQ1、RQ2を中心に、アンケート調査結果の分析を行うことを目的としている点等について示した。
- 第2章は、本部会の研究課題に関して、その先行研究と目される二つの研究（過去の「現代簿記論」）について再考し、これらとの比較を通じて本部会の意義を明らかにするとともに、今後のありうべき未来の「現代簿記論」の見通しと課題について論究がなされた。
- 第3章では、簿記教育に関するRQ1、RQ2を中心に、検証を行った。サンプル選択のプロセスの説明、第1部（問1～問11）回答の記述統計、およびデモグラフィック変数の記述統計をまとめた。第1部の記述統計から、学生の簿記嫌い（または簿記好き）の原因、簿記の範囲、簿記教育において重視される事柄、簿記教育上の利益観、会計基準の改訂が簿記教育に与えてきた影響に関して、全体としての考えを明らかにした。また、デモグラフィックに関する記述統計から、簿記教育に従事する年数が長いグループと短いグループの間に簿記教育の対する満足度に有意な差異があり、前者のほうが不満であると回答した割合が後者のそれより顕著に高いことが明らかになった。

第9章 総括と課題

1 総括

- 第4・5章では、簿記教育に対する満足度・学生の簿記嫌い（簿記離れ）に対する心配度に関して、単変量分析を行った。第4章では、簿記教育に対する満足度によって、回答を不満（回答1・2）、中立（回答3）、満足（回答4・5）に分けて、第5章では、学生の簿記嫌い（簿記離れ）に対する心配度に従って、回答を心配なし（回答1・2）、中立（回答3）、心配（回答4・5）に分けて、学生の簿記離れ（または簿記好き）の原因、簿記の範囲、教育上の簿記と会計の関係、簿記教育の目標、簿記講義の内容、簿記教育上の利益観、会計基準の改訂が簿記教育に与える影響について、グループの間に違いがあるのかを分析した。また、自由記述に基づいて、その差異が生じる理由についても考察を行った。
- 第6章は、簿記教育に関するRQ4について、分析を行った。教育上の簿記と会計の関係について、会員の約6割は簿記が会計に内包される（内包a）、約3割は簿記と会計と共有する部分がありつつ、それぞれに固有の領域がある（共有）、約1割は会計が簿記に内包される（内包b）と捉えている。グループの間、教育目標、簿記講義の内容、利益観、および会計基準改訂の影響に違いがあるのかについて、単変量分析を行った。

第9章 総括と課題

1 総括

- 第7章では、簿記研究に関するRQ1とRQ2に関して、検証した。具体的には、簿記研究に関するアンケート内容に関して、記述統計、デモグラフィック変数の χ^2 乗検定及び、単変量分析を用いて統計解析した。本分析の結果から、簿記研究の満足度の高さは、簿記研究の成果が簿記教育、会計基準の設定、会計教育、会計研究に対して有用であるとの認識に起因していることが明らかになった。一方、簿記研究離れの心配度の高さは、簿記研究の目的や意義のわかりにくさ、資格試験への依存に起因していることが明らかになった。
- 第8章では、簿記研究に関するRQ1からRQ3について追加分析を行った。具体的には、簿記研究に関するアンケート内容に関して、相関分析及び、主成分分析、回帰分析を用いて統計解析した。その結果から、簿記研究の満足度に関しては、簿記研究の役立ちが簿記研究の満足度を高める要因であること、一方、簿記研究離れの心配度に関しては、簿記の特徴や簿記の計算、難しさが簿記研究離れの心配度を高める要因であることが明らかになった。

第9章 総括と課題

2 課題

(1) 本報告書では、アンケート調査に基づく簿記教育、簿記研究の各領域において、RQ1, RQ2を中心に検討を行ってきた。ただし、RQ3, RQ4については、その検討が十分ではないため、今後は、これらについても、詳細に分析する必要がある。

(2) 簿記教育に関する分析結果（第Ⅱ部）と簿記研究に関する分析結果（第Ⅲ部）の関係性と特徴・含意の検討結果、分析結果から得られた問題点を解明・解消するための検討が必要である。

第9章 総括と課題

2 課題

前スライド（2）については特に下記の点が今後の課題となる。

- なぜ簿記教育に従事する年数が長いほど不満が多いのか，それを解消するためにどうすべきかを検討する必要性がある。また，学生の簿記離れの原因が解明されれば，その対応策を今後に検討できる可能性もあるであろうし，簿記の発展に寄与する見込みも高いと考える（第1章で問題提起した簿記の学習者が減少していると思われる状況（簿記離れ）の原因と解消方法も明らかにするとともにその解消方法を検討する機会を得られたと考える）。
- 簿記研究離れの心配度の高さが，簿記研究の目的や意義のわかりにくさ，資格試験への依存に起因していることが明らかになったのであれば，今後それを解消していくためにどうすべきなのか，その解消策も検討する必要性がある。そして，簿記の特徴や簿記の計算，難しさが簿記研究離れの心配度を高める要因であることが明らかになったのであれば，その心配を払拭するためにどうすべきなのかも併せて検討すべきであろう。これらの重要な問題点を解消する多くのヒントや教えが，今回のアンケート調査から得られているのではないだろうか。
- 以上の課題を遂行するため，最終報告は終了するが，今後も本研究部会は一研究会として研究を継続する所存である。
- 学会員諸氏からのコメント・ご批判・建設的なご提案をいただければ幸いである。

【参考文献等】

- 角ヶ谷典幸. 2022. 「簿記と会計の関係性と（学際的）簿記研究の可能性」『簿記研究』5(1), 1-8.
- 中野常男編. 2007. 『複式簿記の構造と機能』同文館出版.
- 日本簿記学会. 2013. 「統一論題報告テーマ『簿記離れと簿記の可能性』」『日本簿記学会年報』28, 19-42.
- 日本簿記学会簿記理論研究部会. 2012. 『平成22年度一平成23年度 最終報告書 現代簿記論に関する研究』.
- 日本簿記学会簿記理論部会. 2025a. 「第40回全国大会・簿記理論研究部会 中間報告（報告要旨）アンケート調査に基づく現代簿記論の研究」『日本簿記学会年報』40, 3-4.
- 日本簿記学会簿記理論部会. 2025b. 「日本簿記学会 令和5・6年度 簿記理論研究部会 最終報告書要旨『アンケート調査に基づく現代簿記論の研究』」.
- 平野智久・吉田智也. 2023. 「簿記と会計との境界一連結財務諸表の作成は、簿記か会計か？一」『日本簿記学会年報』39, 21-22.
- 原俊雄. 2019. 『簿記と帳簿組織の機能一歴史的・国際的視点から』中央経済社.

* アンケートにご協力いただき、
誠にありがとうございました。

本日はご清聴ありがとうございました。

ご質問がありましたら市川までお願いいたします。
ichikawa.noriko@nihon-u.ac.jp